



“知る”の不自由さをもつ私たち

～神の視点には立てないから～

先週の授業参観、PTA総会、全体会、学年・学級懇談会に、ご多用の折、ご参加くださり本当にありがとうございました。全体会において話題にしたことを改めてお伝えします。

様々なテレビドラマを見ていると気がつくことがあります。それは、**ドラマが多元描写**であることです。「学園ドラマ」を例にすると、私たちはシーンの切り替えによって、“教師の事情”と“生徒の事情”の両方を知ることができます。生徒Aを巡るトラブルが起きたとします。私たちは、教師の苦悩も知っているし、生徒Aの抱える葛藤も知っているのです、両者がすれ違ったり、誤解し合ったりするストーリーを、ハラハラドキドキしながら観ているのです。これはいわば、**すべてを見渡せる“神の視点”**です。

でも、**現実の世界を生きる私たちは、誰一人として“神の視点”には立てません**。教師には、児童・生徒の内面が見えないし、児童・生徒には教師の悩みが見えません。親と子の関係だって同じです。もっと言うなら、人間関係はすべてそうです。

「見たいのに見えない」「知りたいのに分からない」・・・そんなもどかしさと悔しさ、そして相手の胸の内が読めない不安を入り交じらせながら（分かりやすい例が片思いです。）、少しでも相手を分かろうとする。それでも“知る”は、決して百パーセントには達しません。だからこそ、人は信じる力と疑う力を得たのだと思います。

ドラマの多元描写の魅力は認めます。でも、“神の視点”に慣れ過ぎないようにしたいと思っています。信じることも疑うことも、不安に駆られることも、期待を胸にわくわくすることも、“知る”の不自由さから生まれます。それがもしなくなったら・・・世の中って、ずいぶん退屈になってしまうと思いませんか？

“知る”の不自由さをもつ私たちだからこそ、敢えてお願いしたいのです。**お子さんが「学校でこんな嫌なことがあった」などと、おうちの方に伝えた際は、「うちの子がこんな風に言っているのですが、学校ではどうでしたか？」と、まずは、学校にお尋ねいただきたいのです。**そのようにご対応いただければ、学校としては事実確認等を行い、お子さんの不安を解消すべくおうちの方と手を携えながら取り組んでいくことができます。**保護者の皆様とは、お子さんのよりよい成長を願うパートナーとして関わっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。**

◆シリーズ⑤最終回◆ コーチ（親）は子どもに代わってプレーしない

自分で靴をはこうとしている幼い子どもは、「自分ではく」という、一大イベントの主役ですが、最初はうまくいきません。そこに脇役であるはずの親が現れ「ほら、さっさとしなさい」と履かせてしまうことで仕事を横取りしてしまいます。このように、自分の仕事を横取りされることは、子どもの生活には意外と多いのではないのでしょうか。ちょっと待てば、子どもにもできるのです が、早くしてほしい親は、「早くしなさい」と言いながら自分でやってしまいがちですね。

子どもの人生の主役は子ども自身です。生きているのは子どもで、体験しているのも子どもです。親にできるのは、やるべきことを子どもに見せ、できるようになるまで待つことです。そのためには、**子どもが幸せに生きられるよう「枠組み」を作り、その枠組みの中で子どものコーチになることです。**コーチは決して選手（子ども）に代わってプレーすることはありません。コーチの仕事は選手の才能を開花させることです。